

## 1. 国際化関連 (1) 多様性

## ④全学生に占める外国人留学生の割合【1ページ以内】

## 【実績及び目標設定】

## 各年度5月1日及び通年の数値を記入

	平成25年度 (H25.5.1)	平成28年度 (H28.5.1)	平成31年度 (H31.5.1)	平成35年度 (H35.5.1)
外国人留学生数 (A)	1,476 人	1,680 人	2,200 人 <del>1,980</del>	2,300 人 <del>2,200</del>
うち、在留資格が「留学」 の者	1,436 人	1,600 人	2,100 人 <del>1,800</del>	2,180 人 <del>2,000</del>
うち、在留資格が「留学」 以外の者	40 人	80 人	100 人 <del>180</del>	120 人 <del>200</del>
全学生数 (B)	18,346 人	18,290 人	18,290 人	18,290 人
割合 (A/B)	8.0 %	9.2 %	12.0 % <del>10.6</del>	12.6 % <del>12.0</del>
	平成25年度 (通年)	平成28年度 (通年)	平成31年度 (通年)	平成35年度 (通年)
外国人留学生数 (C)	2,048 人	2,300 人	3,300 人 <del>2,800</del>	3,500 人 <del>3,200</del>
うち、在留資格が「留学」 の者	1,835 人	2,000 人	2,850 人 <del>2,300</del>	3,000 人 <del>2,500</del>
うち、在留資格が「留学」 以外の者	213 人	300 人	450 人 <del>500</del>	500 人 <del>700</del>
全学生数 (D)	18,346 人	18,290 人	18,290 人	18,290 人
割合 (C/D)	11.2 %	12.6 %	18.0 % <del>15.3</del>	19.1 % <del>17.5</del>

## 【これまでの取組】

東北大学は過去10年間にわたり留学生の受入数上位10位内(国立大学では7位以内)を維持してきた(日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」)。東日本大震災の影響で一時落ち込んだが、最近ようやく留学生数が前年に対し増加するようになった。数のみならず質の高い留学生を戦略的に誘致するために、海外留学フェアや協定校訪問にとどまらず、海外の有力大学の協力を得ながら、本学の研究・教育における取組を紹介する東北大学デイを世界3か国9大学で開催してきた。さらにグローバル30の採択を受け新設した国際学士3コース、13の国際大学院プログラム(修士・博士)、英語による交換留学プログラム、サマープログラムなど、英語のみで学位取得・修了が可能なプログラムを拡充し、世界88か国・地域から約2,000人の多様な言語・文化背景を有する優秀な留学生を戦略的に受け入れると同時に、本学独自の奨学金制度の創設や寮への優先入居措置などインセンティブを考慮した受入体制を整備している。平成22年度には特別訪問研修を制度化し、専門知識の習得、インターンシップ、異文化体験、語学研修等の多様な目的で3日以上3ヶ月未満の留学を希望する在留資格が「留学」でない留学生も積極的に受け入れている。

## 【本構想における取組】

本構想による取組で平成35年度には留学生の受入数を 3,200名-3,500名 とし、留学生の割合を 欧米並みの18%-19% へと引き上げる。これを実現するために、学部では①3ヶ月未満のショートプログラム、②6～12ヶ月の交換留学プログラム、③英語で学位が取得できる国際学士コース、④英語と日本語のハイブリッド型学士コースを充実させ、留学生数の倍増を図る。様々な質の高いプログラムを開発し、また受入体制・支援を完備することで短期や学部で受け入れた優秀な留学生をより長期の留学や大学院進学へと繋げられる戦略的な受入施策を策定・実施する。

大学院では、国際大学院プログラムを拡充するとともに、共同研究のさらなる活性化により、①研究を目的とした短期訪問及びワークショップ型留学、②学術交流をベースとした交換留学、③ダブルディグリー(ジョイントディグリー)プログラム、④研究インターンシップなどを中心に、これまで受入実績数の少なかった国・地域・機関からも積極的に優秀な留学生を迎え入れる。

上記を実現するために、留学生の戦略的なリクルーティング、世界各国の教育制度の把握及び単位互換、学位審査制度や入試制度の国際標準化、奨学金をはじめとする留学生の支援体制を整備し世界に開かれた知の共同体づくりを目指す。

## 1. 国際化関連 (2) 流動性

## ②大学間協定に基づく交流数【1ページ以内】

## 【実績及び目標設定】

## 各年度通年の数値を記入

	平成25年度	平成28年度	平成31年度	平成35年度
大学間協定に基づく派遣日本人学生数 (A)	269 人	375 人	<del>720</del> 490 人	<del>800</del> 630 人
うち単位取得を伴う学部生数	134 人	150 人	<del>500</del> 180 人	<del>560</del> 210 人
うち単位取得を伴わない学部生数	49 人	70 人	<del>100</del> 90 人	<del>110</del> 120 人
うち単位取得を伴う大学院生数	5 人	35 人	<del>40</del> 80 人	<del>45</del> 140 人
うち単位取得を伴わない大学院生数	81 人	120 人	<del>80</del> 140 人	<del>85</del> 160 人
全学生数 (B)	18,346 人	18,290 人	18,290 人	18,290 人
割合 (A/B)	1.5 %	2.1 %	<del>3.9</del> 2.7 %	<del>4.4</del> 3.4 %
大学間協定に基づく受入外国人留学生数 (C)	351 人	530 人	720 人	910 人
うち単位取得を伴う学部生数	208 人	300 人	400 人	500 人
うち単位取得を伴わない学部生数	3 人	20 人	40 人	60 人
うち単位取得を伴う大学院生数	100 人	150 人	200 人	250 人
うち単位取得を伴わない大学院生数	40 人	60 人	80 人	100 人
全学生数 (D)	18,346 人	18,290 人	18,290 人	18,290 人
割合 (C/D)	1.9 %	2.9 %	3.9 %	5.0 %

## 【これまでの取組】

積極的に拡大してきた学術交流協定を数年前より研究・教育交流の活動実績に基づき、見直すことで交流活動の質を高める努力を重ねている。協定校とは国際教育学会（アメリカ地区（NAFSA）、ヨーロッパ地区（EAIE）、アジア環太平洋地区（APAIE））や、大学訪問、Eメールを通じて情報交換を行い、派遣・受入れのバランスを考慮しながらも学生の国際モビリティ（流動性）の向上を共通目標とした臨機応変な対応・支援において協働が成立しており、交流枠の拡大や受入れ基準・条件の設定についても迅速な意見交換ができています。受入数・応募者数ともに、過去数年間で倍増した交換留学受入れプログラムのさらなる拡大に必要な制度改正や新規プログラムの開発にも積極的に着手した。派遣留学を推進するために年2回の開催に留まっていた留学説明会を「留学応援月間」に発展させ、様々な角度で留学を推進するイベントを集中開催している。これらの受入れ・派遣の流動性を高める取組は協定に基づく学生交流数の増加に結びついている。

## 【本構想における取組】

学術交流協定校の見直しを戦略的パートナーシップの整備に発展させ、研究交流を基盤とした従来の協定を教育交流に発展させるためのシステム構築を進め、同時に学生交流を基軸とした協定の締結も積極的に推進する。とりわけ、学生が留学を希望しつつも派遣先が限定されている欧米、学部教育を英語で実施している欧州の著名校を中心に教育水準の高い協定校を開拓し、派遣プログラムの確保や短期研修プログラムの共同開発など教育交流を進めるためのネットワーク形成に努める。そのために学内に部局を超えた「国際展開戦略チーム」を組織し、地域別の戦略に基づきパートナーシップ形成を推進する。既存交換プログラムの受入数をさらに拡大するとともに欧・米・豪や東南アジアの日本語学習者を幅広く受け入れるための新規プログラムを設置する。これにより協定に基づく受入数を現在の年間350名から900名に、派遣数を年間270名から630名800名に拡大する。協定に基づく学生モビリティの活発化を目的とした短期研修プログラムを協定校と共同開発し、短期からより長期の交換留学に繋げるシステムを構築する。

## 1. 国際化関連 (4) 語学力関係

## ②外国語のみで卒業できるコースの数等【2ページ以内】

## 【実績及び目標設定】

各年度5月1日の数値を記入

	平成25年度	平成28年度	平成31年度	平成35年度
外国語のみで卒業できるコースの設置数 (A)	24 コース	26 コース	<del>26</del> 25 コース	<del>42</del> 43 コース
うち学部 (B)	3 コース	3 コース	<del>3</del> 5 コース	<del>3</del> 8 コース
うち大学院 (C)	21 コース	23 コース	<del>23</del> 30 コース	<del>39</del> 35 コース
全学位コースの数 (D)	57 コース	57 コース	<del>56</del> 57 コース	<del>56</del> 57 コース
うち学部 (E)	13 コース	13 コース	13 コース	13 コース
うち大学院 (F)	44 コース	44 コース	<del>43</del> 44 コース	<del>43</del> 44 コース
割合 (A/D)	42.1 %	45.6 %	<del>46.4</del> 61.4 %	<del>75.0</del> 75.4 %
割合 (B/E)	23.1 %	23.1 %	<del>23.1</del> 38.5 %	<del>23.1</del> 61.5 %
割合 (C/F)	47.7 %	52.3 %	<del>53.5</del> 68.2 %	<del>90.7</del> 79.5 %
外国語のみで卒業できるコースの在籍者数 (G)	264 人	370 人	550 人	800 人
うち学部 (H)	39 人	100 人	<del>100</del> 150 人	<del>100</del> 200 人
うち大学院 (I)	225 人	270 人	<del>450</del> 400 人	<del>700</del> 600 人
全学生数 (J)	18,346 人	18,290 人	18,290 人	18,290 人
うち学部 (K)	11,223 人	11,253 人	11,253 人	11,253 人
うち大学院 (L)	7,123 人	7,037 人	7,037 人	7,037 人
割合 (G/J)	1.4 %	2.0 %	3.0 %	4.4 %
割合 (H/K)	0.3 %	0.9 %	<del>0.9</del> 1.3 %	<del>0.9</del> 1.8 %
割合 (I/L)	3.2 %	3.8 %	<del>6.4</del> 5.7 %	<del>9.9</del> 8.5 %

## 【これまでの取組】

学士課程（国際学士コース）については、グローバル30のもと平成23年10月から理学部、工学部、農学部においてコースを開設した。海外での留学フェア・高校訪問、Webサイトの充実、海外の高校の先生や生徒を招待してのサマースクールなどの広報活動により、コースの認知度が徐々に増してきており、志願者の著しい増加と入学者の増加に繋がってきている。入学した学生の質についても、成績分布や教員の判断等から日本人学生以上の質が保証されている。

大学院においては、グローバル30開始前の平成13年に1プログラム、平成16年に1プログラム、平成17年に1プログラムを開設済みであった。その後、グローバル30において、平成21年10月に1プログラム（修士・博士プログラム）、平成22年10月に3プログラム（修士1プログラム、修士・博士2プログラム）、平成23年4月に2プログラム（修士1プログラム、修士・博士1プログラム）、平成23年10月に2プログラム（修士1プログラム、博士1プログラム）、平成24年10月に2プログラム（修士1プログラム、博士1プログラム）と合わせて13プログラム（修士定員88名、博士定員75名）を開設した。

グローバル30によって整備された16のプログラムの詳細は次のとおりである。

## 国際学士コース：

国際機械工学学士コース	(工学部)
先端物質科学コース	(理学部)
国際海洋生物科学コース	(農学部)

## 国際大学院コース：

サステナブル環境学国際コース	(環境科学研究科 前期・後期)
国際機械工学修士・博士コース	(工学研究科 前期・後期)

(大学名：東北大学) (申請区分：タイプA)

国際材料科学修士コース	(工学研究科 前期)
経済学・経営学国際コース	(経済学研究科 前期・後期)
インフォメーションテクノロジーアンドサイエンスコース	(情報科学研究科 前期)
インターフェイス口腔健康科学	(歯学研究科 後期)
ネットワークメディスンコース	(医学系研究科 後期)
基礎医学コース	(医学系研究科 前期)
言語総合科学コース	(国際文化研究科 前期)
学際先端工学特別コース	(工学研究科・情報科学研究科・環境科学研究科 後期)
先端理学国際コース	(理学研究科 前期・後期)
ヒューマン・セキュリティ国際教育プログラム	(医学系研究科・環境科学研究科・農学研究科・国際文化研究科 前期・後期)
生命科学国際コース	(生命科学研究科 前期・後期)

コースの数え方：東北大学学位規定における専攻分野に基づいて算出している。

### 【本構想における取組】

今後も「門戸開放」の精神の一層の進展を図り、国籍や言語・ジェンダーなどに関わらず、優秀な学生を世界中から受け入れる。そのため、適切な言語による多様な国際コースを充実させ、世界中の学生に提供する。英語のみのコース、英語から日本語へのハイブリッドコース、日本語のコース等多様な国際コースを開発するとともに、外国人留学生のみならず日本人学生もこうした国際コースに積極的に受け入れ、真に国際的な教育を行っていく。

学士課程：

これまでのコースを継続し発展させていく。特に工学部の国際学士コース（IMAC-U）においてグローバル型 A0 入試を行い、日本人学生にも広く門戸を開放する。このグローバル型 A0 入試では、大学進学適性試験（SAT）や国際バカロレア等の成績の提出を認め、TOEFL 等の英語能力試験の成績結果の提出を課すものとする。これは、理工系における秋入学プログラムの実施でもあり、ギャップタームにおける英語能力の強化や数物系の予備教育等を行っていく。ほかの国際学士コースにおいても、グローバル型 A0 入試の導入を検討していく。

学士課程においては、今後文系、理系双方において複数学部による学部横断的な国際学士コースを新設し、鳥瞰的な視野かつ高度な専門性を持つ学生の育成を図る。また、英語の授業から学年進行で徐々に日本語を交えた授業へと移っていくハイブリッド型の国際学士コースを立ち上げ、世界の留学生マーケットへの参入を加速するとともに、日本企業や日本社会への定着を目指す留学生や社会のニーズに合致したプログラムを提供する。ハイブリッド型では低学年では英語で、高学年では日本語と英語を併用し、日本語の運用能力が不十分であることに配慮した授業とする。同時にこれらの講義を日本人学生にも開放し、彼らにとっては英語による授業への準備と位置付ける（ハイブリッド型のコースは、目標設定の数字には含めていない）。

大学院修士・博士課程：

英語による国際コースの拡大を図る。10年以内に全ての研究科が英語のみで修了できる国際コースに参画するようにするとともに、国際コースで学ぶ外国人留学生数・日本人学生数を増加させる。また、特に文系においては専門分野の特性に応じ、適切な言語を用いた特色ある国際コースを設置することとし、英語による国際コースの拡大はもちろんのこと、ハイブリッドのコースや日本語で教授する国際コースを創っていく。

また、「国際共同大学院プログラム」において、英語によるコースを設置し、外国人留学生の受入れや連携先大学からの共同教育に参加する学生の受入れを積極的に進める。

これらの多彩な国際コースにおいて海外の大学との協定により、ジョイントディグリー、ダブルディグリー等の国際共同教育を数多く実施する。